

三鉄の電化

大正15年2月5日

大正 11 年 12 月 29 日 電化工事と足助・蒲郡への延長建設のため、資本金 4 0 0 万円増資決議。

大正 13 年 2 月 27 日 4 0 0 万円増資して資本金 5 2 5 万円とした。

大正 14 年 8 月 15 日 電化工事に着工し同年 12 月末完成。

大正 15 年 2 月 5 日 全線(大浜港～猿投間)電化。 刈谷・猿投変電所新設。

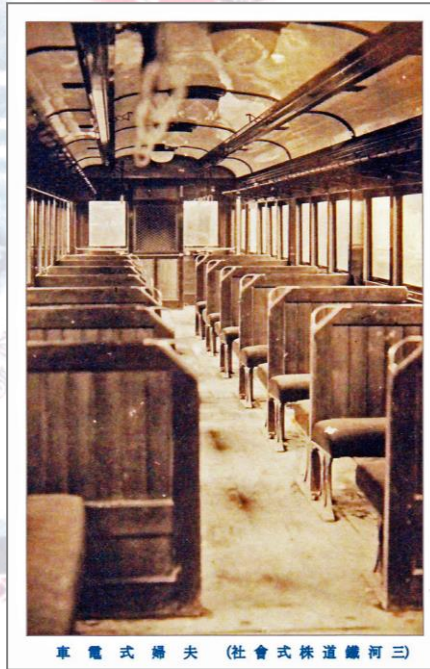
刈谷新～大浜港間→12 往復から 20 往復に、刈谷新～猿投間→9 往復から 18 往復に増発。

※大正 15 年 9 月 1 日 大浜港～神谷間開通のとき大浜(昭和 22 年 3 月「新須磨変電所」に改称)変電所
新設。(昭和 59 年 3 月 16 日…北新川変電所新設し、刈谷・新須磨変電所廃止)

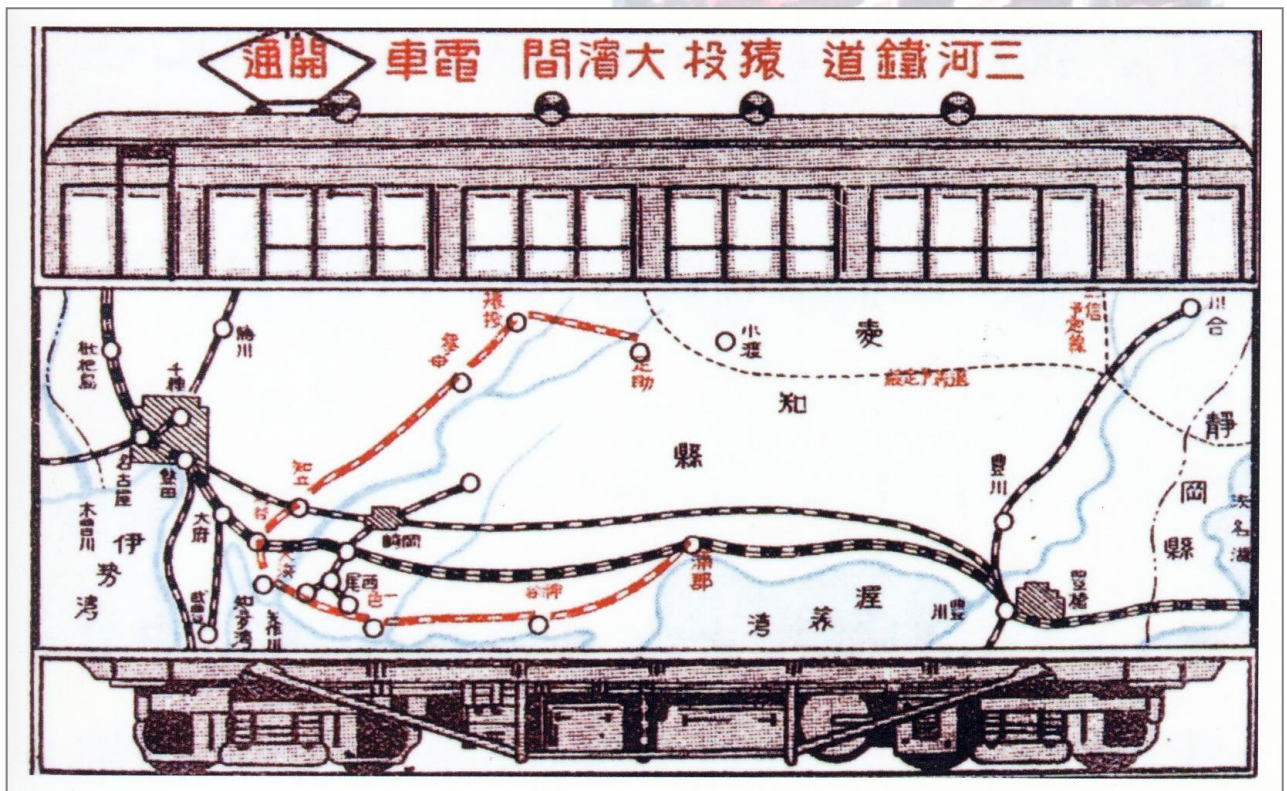
右…100 形のクロスシートロマンスカーは、当時
夫婦式電車と呼ばれていた。

100 形はボギー台車で、乗り心地も一段とアップ。

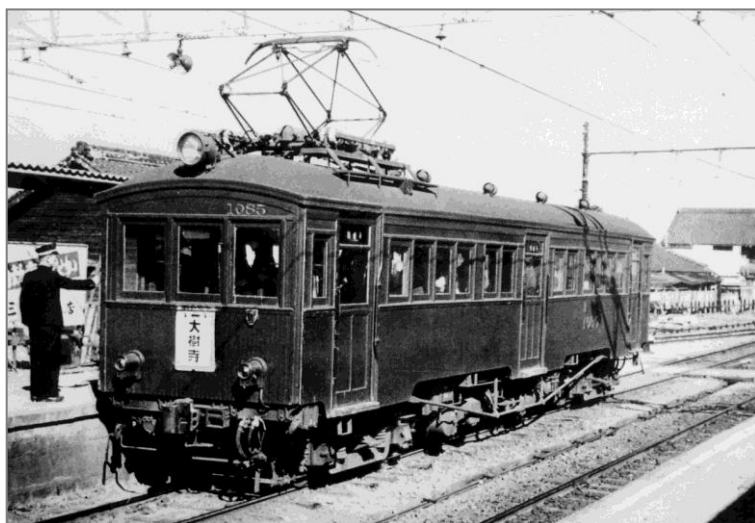
(注) 100 形は、正式には「デ 100 形」後の 1080 形



三河鉄道が「電化記念」で発行した絵葉書→DVD所有者は裏面参照「夫婦式電車」の証しが…。



三河鉄道の100形車両は、名古屋鉄道と合併3か月後の昭和16年9月、車両番号を「1080形」に変更。昭和30年代前半まで三河線で活躍した。このうち1088の台車は3715に、1087は3716号車に使用された。

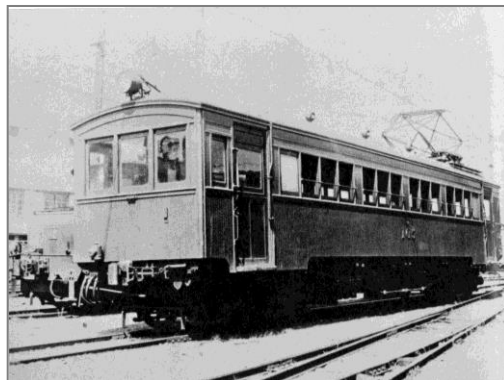


上挙母…100形から車番変更した1080形

大正15年2月、デビューしたとき、内装はクロスシートであったが、車両番号を変更したとき併せて、ロングシート化及び片側3扉に改造された。

車両長…15.291m 自重…29.3t 65PS×4 定員100(48)

また、同9月1日に大浜港～神谷(松木島)間が開通、新造のクハ50形4両が登場したと記録にある。



上…三河鉄道が電化したときの100形

6両(101～106)を田中車両で新造し1年後の昭和2年東洋車両で製造された2両が107号車と108号車である。

したがって、1080形は計8両で1081～1088号車までであった。101～106と107.108では寸法や細部が若干異なっていた。(田中車両→現・近畿車両)

三河鉄道の宝物

名鉄資料館所蔵

古レール



矢作川鉄橋(海・廃線区間)や西浦駅の工事用車両留置線にアメリカ製・ドイツ製の古レールが…。その一部が「名鉄資料館」に保存。詳細は「鉄道ピクトリアル」2009年3月臨時増刊号及び9月号に掲載。



大正3年3月1日改正

三河鉄道の時刻表は129頁に掲載



三鉄マークの境界杭

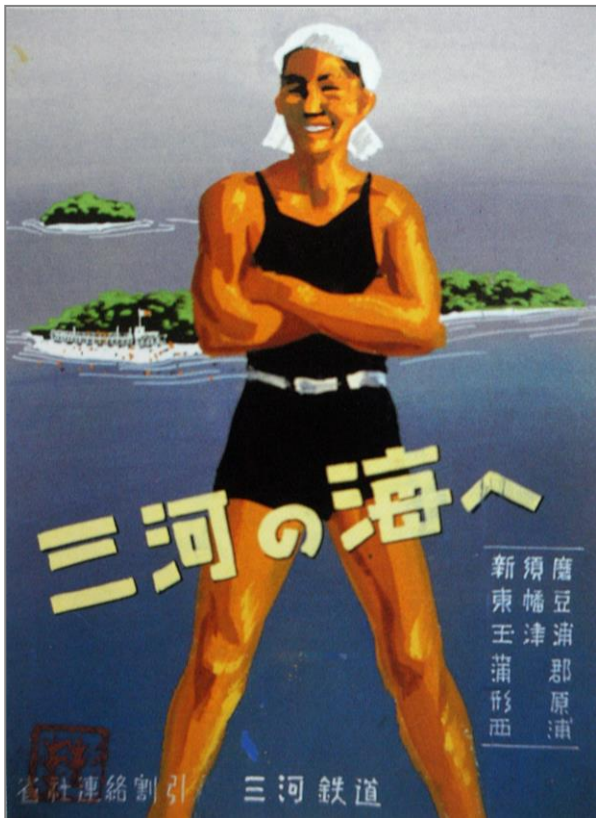
鳥瞰図

名鉄資料館所蔵



三河線の鳥瞰図が4枚あったが、私が選んだこの鳥瞰図は、矢作古川が本流で矢作川が支流のように描かれていたからである。もともと矢作古川が本流であったが、下流の川幅が狭く上流で大雨が降るたびに下流で水害が発生し、人家や田畑が多大な被害を受け人々を苦しめていた。矢作川の河口は油ヶ淵を含め米津橋まで入海だった。そこで、慶長8年(1603)徳川幕府の命令で水路を開削し、矢作川の水が米津付近の入海に流れるようにした。続いて、正保元年(1644)米津から鷺塚まで堤防を築いた。鷺塚まで堤防を築いたことで油ヶ淵が湖沼となっていました。その後、堤防は延伸され現在の姿になった。

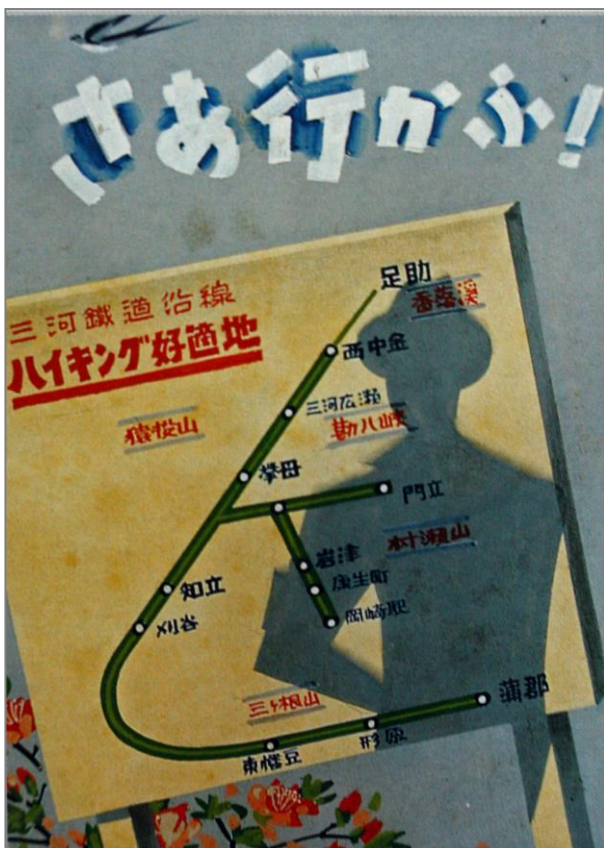
元来、矢作古川側が本流だったため、この鳥瞰図も矢作古川が直線で描かれているような気がします。そう感じるのは私だけでしょうか。



杉本健吉画伯[明治38年(1905)~平成16年(2004)]とは、三河鉄道も名古屋鉄道も昭和初期から親交があったことが分かる貴重な資料。

杉本健吉画伯の ポスター

香嵐溪のポスターは、名鉄が三鉄と合併前に名鉄の観光地用ポスターとして作成したもの。



昭和10年前後のポスター…名鉄資料館・杉本美術館所蔵

三鉄マークの鬼瓦

三鉄マークの鬼瓦は、3種類ありました。
 挙母線(昭和48年3月4日廃線)岩津駅には2種類使用。三鉄の守護神が「岩津天神」であったので特別扱い？



在りし日の岩津駅舎



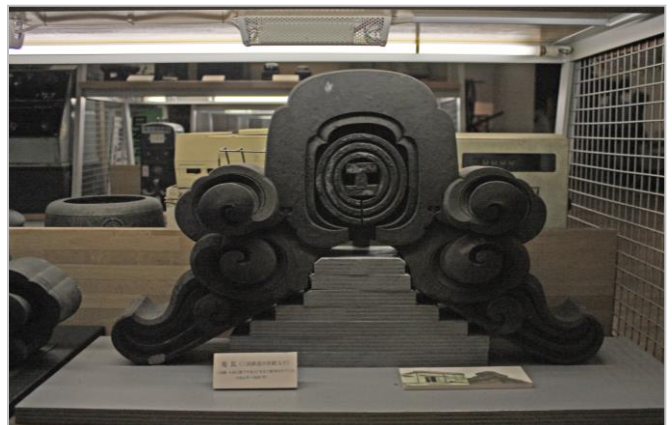
岩津駅舎の鬼瓦→上…側面に使用されていた。

左下…正面に使用されていた。

岩津駅舎の側面に使用していた鬼瓦は名鉄資料館で確認したが、正面の鬼瓦は挙母線廃線後、一度も確認していない。何処に？



下…名鉄資料館所蔵(小垣江駅に使用されていたもの)
 小垣江駅鬼瓦の1個は「高浜市かわら美術館」に二度ほど確認に訪れたが展示されていなかった。



名鉄資料館…平成21年10月28日

下…小垣江駅・1駅で9個の鬼瓦を使用



駅舎解体後、鬼瓦は各所へ寄贈されたと聞く。
 駅舎解体前、鬼瓦が盗難にあったというが…。

下…小垣江駅(平成10年11月)



海水浴場



玉津浦・新須磨・新明石海水浴場



最後の海水浴往復乗車券

海水浴往復乗車券 (玉)			
№ 0810	№ 0810	№ 0810	№ 0810
碧 南から	玉津浦海岸から	碧 南から	玉津浦海岸から
ゆき	碧 南ゆき	玉津浦海岸ゆき	碧 南ゆき
通用 36.7.1から 36.8.31まで	通用 36.7.1から 36.8.31まで	通用 36.7.1から 36.8.31まで	通用 36.7.1から 36.8.31まで
割引 220			

昭和 24・5 年頃から海水浴シーズンは玉津浦から海岸まで貨物専用線を使用して海水浴客を花電車(当初は「お伽の国電車」と呼称)で輸送していた。伊勢湾台風(昭和 34 年)で貨物線が使用不能となり昭和 35・36 年は碧南から玉津浦海岸までバスで輸送。以後、海岸を埋め立て臨海工業地帯に変身し海水浴場は消滅したがヴィーナス像の噴水式シャ

ワー塔(大浜熊野大神社の境内)は当時のまま現存している。

新須磨海水浴場にもヴィーナス像のシャワー塔があったが昭和 49 年碧南市営衣浦マンモスプールの入口に移設、平成 15 年にマンモスプール閉鎖。平成 20 年市内の宮町公園に再移設された。シャワー塔の台座がないためか新須磨海水浴場で見たヴィーナス像と異質なものと感じたが…本物とのこと。

(注) 玉津浦・新須磨海水浴場のヴィーナス像は、碧南市新川町出身の彫刻家・加藤潮光氏の作品。

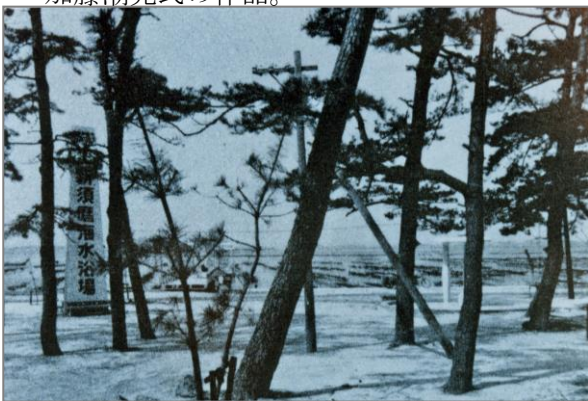


下…新明石(新川海岸)海水浴場



新須磨海水浴場のヴィーナス像、現・宮町公園(通称…さかな公園)にある。

左…在りし日の新須磨海水浴場の松林



熊野神社の海岸一帯が瀬戸内海の須磨の浦に面影が似ているところから「新須磨海水浴場」と名付けてPRをした。

下…新須磨海水浴場のシャワー塔とヴィーナス像



玉津浦・新須磨・新明石海水浴場とも埋め立てられて一大工業地帯に変身し、昔の面影はない。



碧インター東の橋脚に描かれている壁画



なつかしい新須磨海岸

中央：新須磨海岸〈大正末期〉奥谷朝夫氏提供の写真による
 左上：新須磨海岸夜景 吉田初三郎画による絵はがきより
 左下：新須磨駅〈昭和41年〉倉知満孝氏撮影写真による
 右円内：明石海岸の栈橋〈昭和30年代〉
 構成・画 杉浦イッコウ 2001.8



(注) 上の刻印…明石海岸は「新明石海岸」が正当

下…新明石海岸の栈橋



上…新須磨海岸夜景

下…新須磨駅



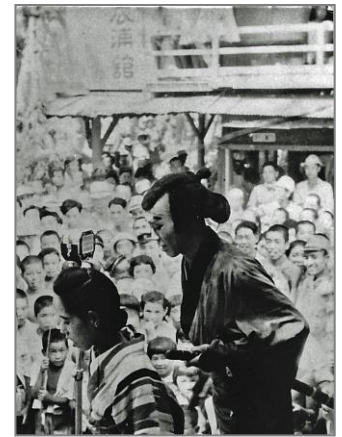


熊野神社北側の松林内にあるベンチ→海水浴客が使用していた現存するただ1個のベンチ
往時は、10数個あったという。



海岸で記念写真を撮る芸人一座

下…衣浦館前で海水浴客に芸を披露する芸人たち。



上…衣浦館と微かに読める

新須磨海水浴場開設と共に料理旅館「衣浦館」として創業。夏は浜辺に休憩所を設けて海水浴客を接待、昭和37年防潮堤建設で海水浴場は消滅。その後「かっぽう衣浦閣」と改名して営業を続けてきたが、平成23年5月28日閉店。現在は喫茶店「茶亭 風和里」を平成23年11月18日オープン。隣の姉妹店…ビジネスホテル「新須磨」の玄関脇に何故か“新須磨駅”の駅名板が…？



写真は平成22年5月撮影(裏に平成24年4月8日撮影の写真有…DVD持参者参照)

煉瓦造りの開渠



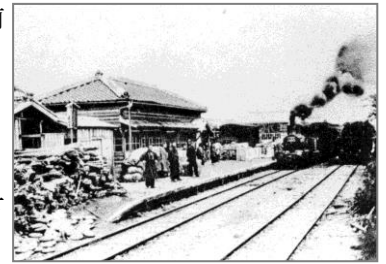
開業(大正9年)当時、建設された「金谷下開渠」場所は上挙母～豊田市間 煉瓦造りの構造物としても貴重なもの。

高浜港駅舎内に

大正時代の写真が…



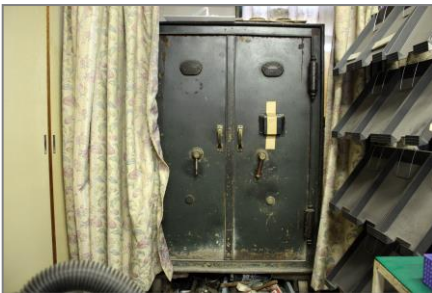
あれっ！ちょっと変？40年前と少し違うようだ。歴代の駅長に尋ねる。平成9年頃、以前の写真から複写したとのこと。
左…平成21年12月30日撮影
右…昭和45年頃に撮った写真
左の写真は複写したため、上下及び左右がカットされている。



※拡大して見ると「大正時代の高浜港駅」と記してある。

三鉄時代からの大金庫

碧南駅と知立乗務区



大浜港(現・碧南)では開業から平成21年8月24日まで使用していた金庫。この金庫も駅員無配置化で無用の廃物に。

縦138、横99、奥行88、足…21cm

知立乗務区では今も現役中…縦118、横88、奥行60cm



(平成25年12月現在)

踏切安全地蔵



「踏切安全地蔵…き志やにちゆいすべし」と刻印。汽車が走っていた証しである。

…北新川駅構内(新川町7号踏切脇)

名鉄三河線



三鉄の社紋

昭和16年6月1日
名古屋鉄道と合併

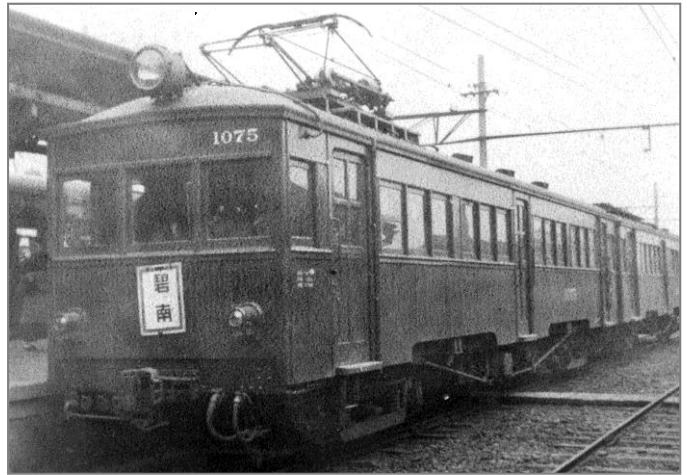


名鉄の社紋

木造車

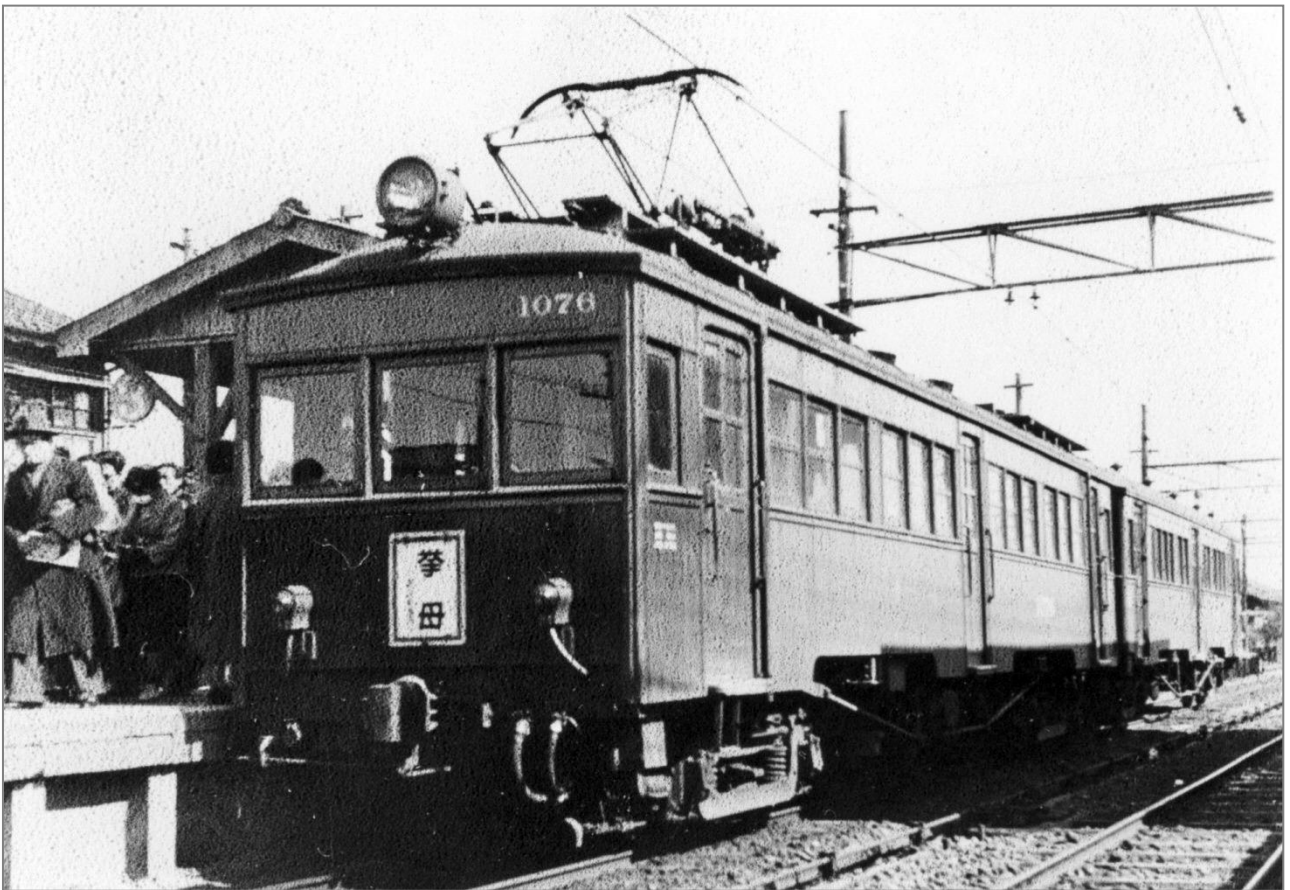


西中金のホーム…三河広瀬方は法面だった。

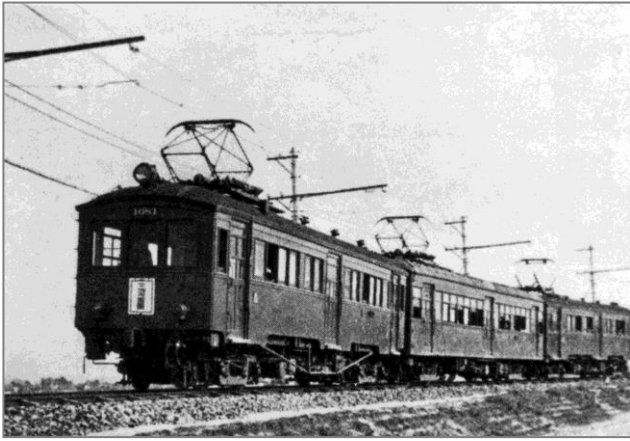


知立(現・三河知立)…1075号車

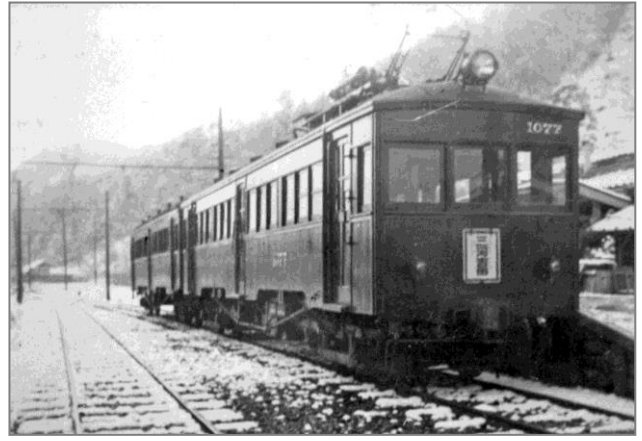
電車の原点はHL車。運転士の技量に差の出る電車。モーターの唸りを聞きながら1ノッチ1ノッチ、ノッチを進める。早くノッチを投入するとOLRが動作し乗り心地が悪くなる。遅く投入すると電気の浪費。もう一度、運転したくなる不思議な電車。それがHL車。



1070形は愛知電気鉄道が大正13年から大正14年にかけて日本車両製造で新造した電6形で、デハ1060～1064、1066～1074の14両で、昭和10年、名岐鉄道と愛知電気鉄道が合併するとデハ1060形のうち、複電圧車(1060～1064)はモ1060形に1500V専用車(1066～1074)はモ1070形に車番変更。
※ 三河線で活躍した木造車や半鋼製車の台車は、昭和32年から逐次3700系に改造された。



三河八橋～知立(現・三河知立)間…1081号車



西中金…1077号車(旧電6形)



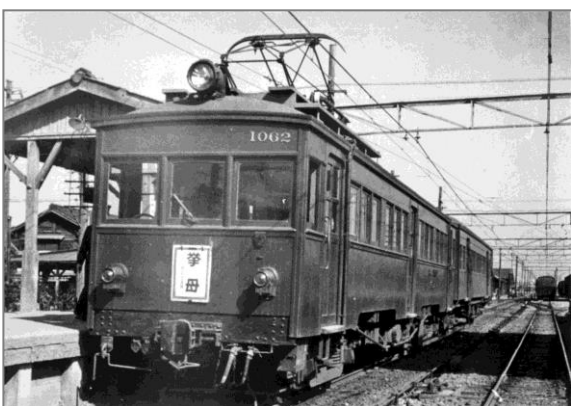
矢作川(海)…デ100形と50形



北新川～新川町間…1101号車(旧デ200形)



大樹寺…1081号車(旧デ100形)

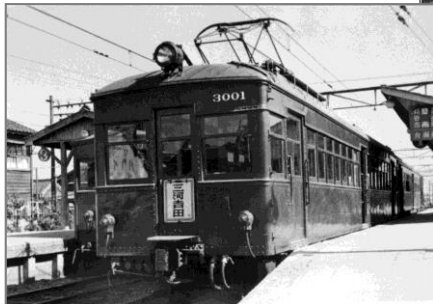


知立(現・三河知立)…1062号車(旧電6形)



知立(現・三河知立)…1091号車(旧デ150形)

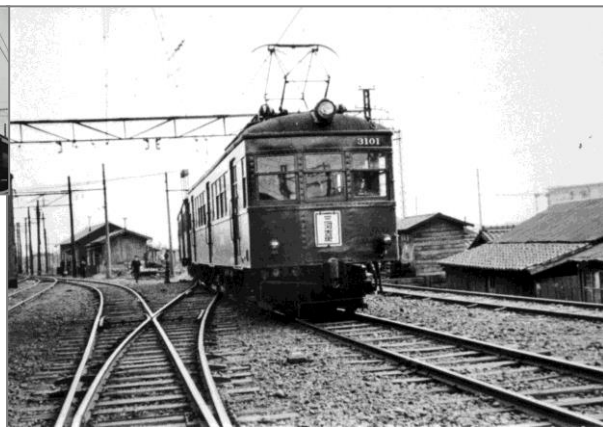
半鋼製車



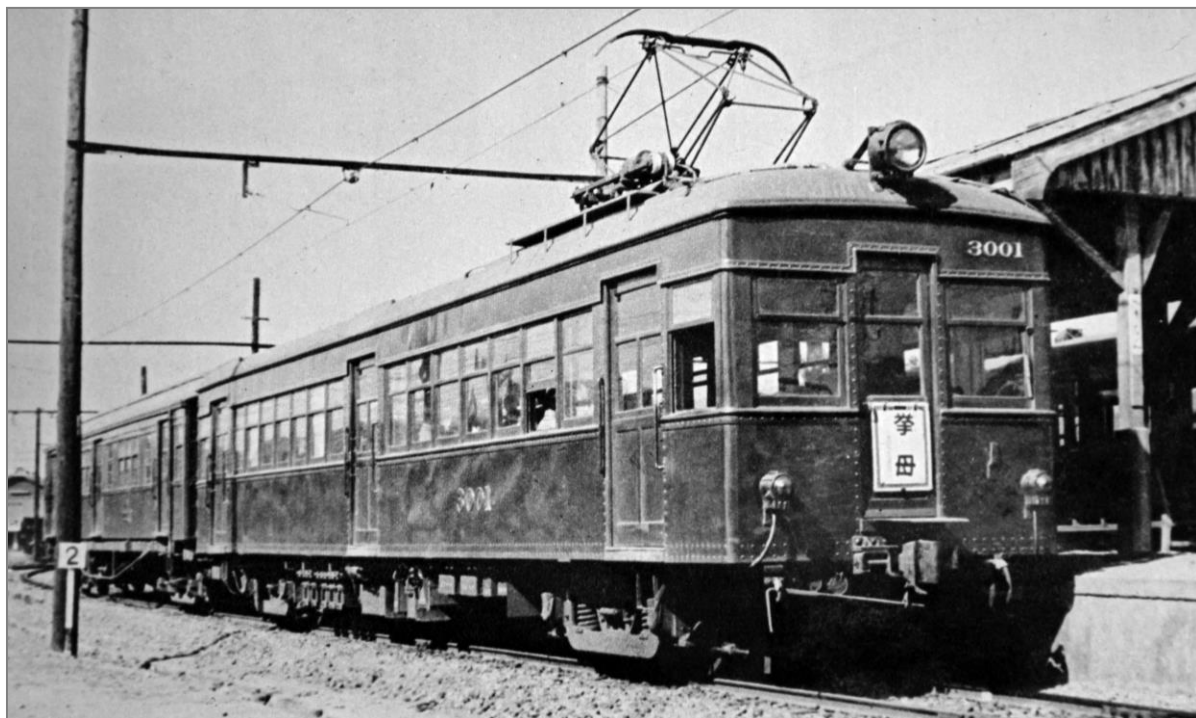
知立(現・三河知立)…3001号車



3002号車
(旧デ300形)



知立方から刈谷へ進入する3101号車
(旧デ400形)



昭和4年1月 100PS×4 定員120(56) 三河鉄道の旧デ300形でデビュー
名古屋鉄道と合併、3か月後の9月 車両番号をモ3000形に変更された。

初代・野村福太郎刈谷乗務務区長によると3001号車は、日本車両製であるが配線工事は刈谷工場内で施工し工場内で最終テスト。「レバー前進1ノッチ」前に進むと思いきや後戻りの逸話を持つ車両とか？



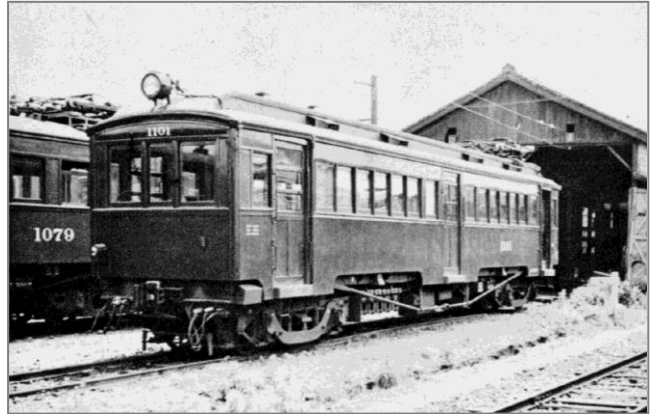
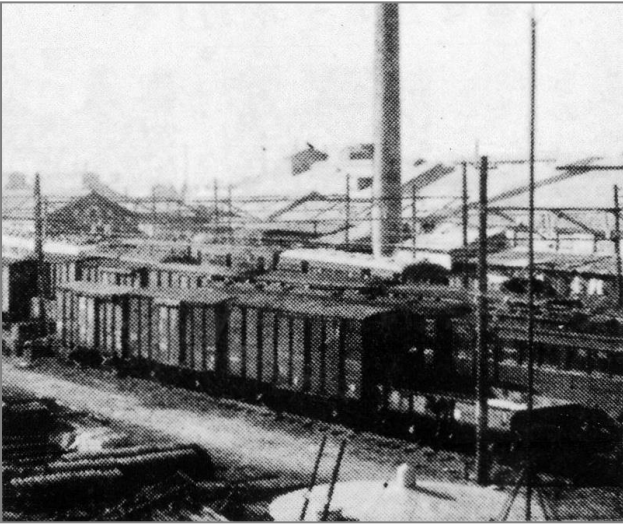
矢作川(山)…3001号車(旧デ300形)



知立～三河知立間…3205号車(旧電7形)

在りし日の

刈谷工場



昭和3年、伊那電気鉄道からデ200形を購入した三河鉄道は名古屋鉄道と昭和16年6月1日、合併、その年の9月にモ1100形に車番変更された。



工場内で車内外清掃中の1084号車

全鋼製車...3700系

木造車(1060.1070 など)や半鋼製車(3000.3200 など)を改造して生まれ変わったのが3700系。



第1期車として、昭和32年10月1日3700形(3701=3702と3703=3704の2編成)がMMで登場しが、加速が高過ぎ乗客に不評のためMT組成に変更された。

踏切事故防止対策の一環として、昭和36年以後M台の腰掛を嵩上げし運転士の頭部がダンプカーの荷台より高くなるように改良された。嵩上げたM台は、正面運転室の窓枠を見れば分かる。



西中金…手前右側の側線に貨物ホームが見える



矢作川橋梁(枝下～三河広瀬)



西中金



知立…左から4・3・2番線
1番線は留置線(側線)



平戸橋

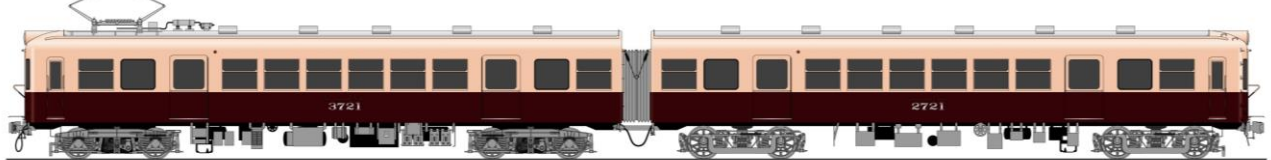


三河知立～知立

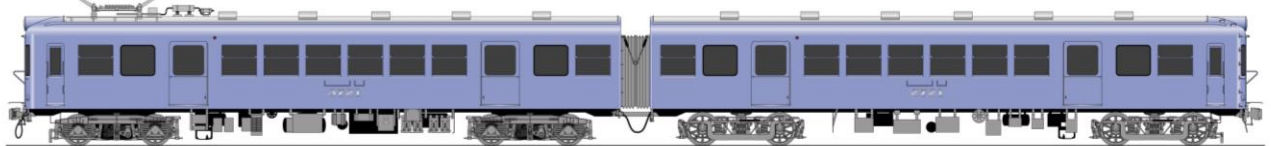


西中金の乗務員合宿所と3700形

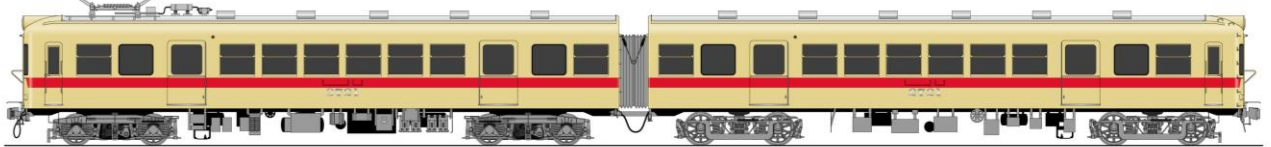
昭和32年10月1日ライトピンクとダークマルーン(通称…チョコツートン)でデビュー



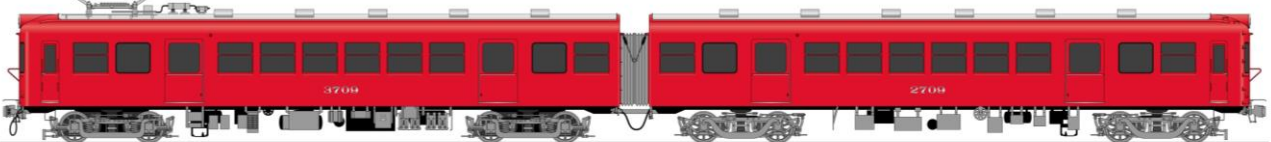
昭和41年7月12日から順次「ライトパープル」色で登場



昭和42年7月13日から順次「ストロークリームとスカーレット帯」色に
(ライトパープルは線路係員に不評のため変更)



昭和51年10月から順次、7000系と同色のスカーレット色に

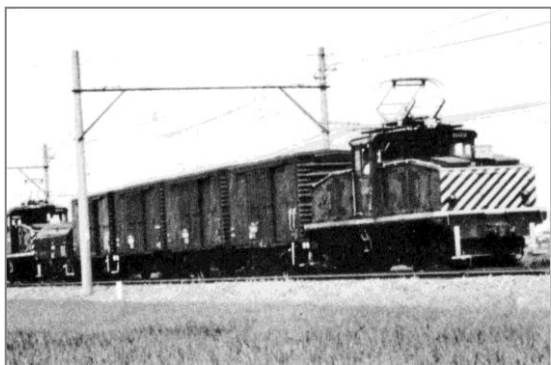


電気機関車

三河線で活躍した電気機関車



重原



重原～三河知立間

貨物列車は知立駅に入線せず、重原⇄三河知立間
直通運転(貨物専用線…昭和59年1月1日廃線)

三河鉄道キ10形 = デキ300形



刈谷

購入し、その後、三河鉄道へ譲渡されたもので、他のデキ300形と車体長・形状などが若干異なる。

風の便りによると、現在300形は工場内で廃車の日を待っているとか。また近々400形、600形も廃車され、創業120年に因み、EL120形が新造されるという。



親子ハンドルの500形

上田電鉄から譲受け
昭和15年三河鉄道へ
名古屋鉄道と合併後
は主に尾西線などで
活躍。昭和44年前後、
三河線で再び活躍、45
年に岳南鉄道へ。



平成5・6年の車体更新工事の際、塗装を黒色から
メイテツブルーに変更。(※303.305.306…現存)



土橋

名鉄では、つい先日まで三河鉄道時代を偲ぶ
車両が活躍していた。それは電気機関車300
形。電気機関車300形は、昭和2年8月～4
年9月、三菱造船所で製造した新造車両の生き
残り、三河鉄道時代キ10形電気機関車とし
て活躍していたが、昭和16年6月1日、名古
屋鉄道と合併。3か月後の9月、車両番号変更
整理をしたとき300形に車番変更された。

このうち306号車は、同じく三菱造船所で
製造した電気機関車であるが、一畑電気鉄道が

デキ400形 & デキ600形



三河知立



猿投

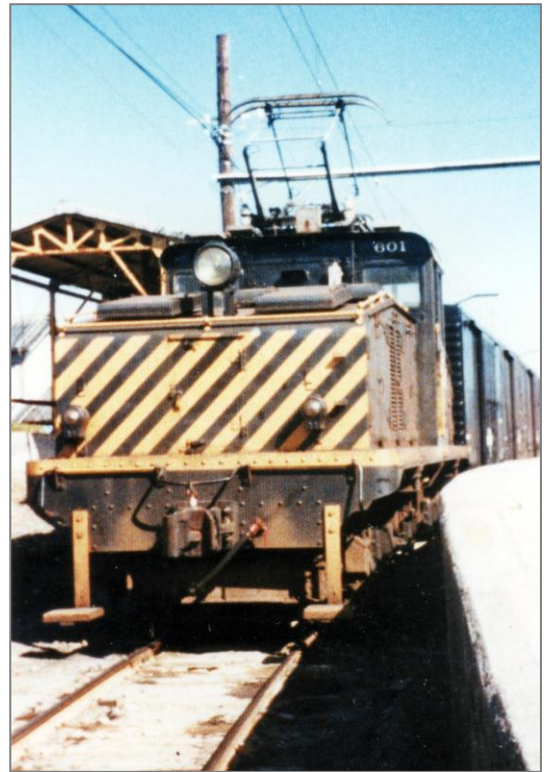
デキ 400 形(401.402 の 2 両)は昭和 6 年愛知電気鉄道が発注(日本車両)した電気機関車で昭和 10 年 8 月、名岐鉄道と合併したときも 400 形を名乗った。一方、デキ 600 形(601~604 の 4 両)は昭和 18 年、名古屋鉄道が発注(東芝)した電気機関車である。(※ 401.402&601~604...現存)

昭和 30 年代半ばになるとトラック輸送が急成長し鉄道の貨物輸送が衰退していった。名鉄でも貨物営業取扱駅が次々と集約され、貨物列車の列車本数が減少。昭和 41 年になると名古屋本線西・尾西線・津島線などでは貨物列車が廃止された。余剰となった 400・600 形の電気機関車が三河線に入線してきた。

昭和 41 年 2 月から名古屋本線の矢作橋、東岡崎、美合の貨物列車は知立乗務区が知立信号所経由で担当した。



碧南



猿投



平成 5 年(1993)の特別整備の際、塗装を黒色からメイテツブルーに変更。



平成 4 年(1992)の特別整備の際、塗装を黒色からメイテツブルーに変更。

知立連絡線

(知立信号所)



知立信号所…三河鉄道と愛知電気鉄道の貨物相互乗入れ線として、知立(現・三河知立)～知立信号所間 0.8km を昭和 3 年 6 月 1 日開通。
(昭和 59 年 4 月 1 日廃止)

昭和 16 年 6 月 1 日、名古屋鉄道と合併、不便であった新知立駅(後の東知立=昭和 43 年 1 月 7 日廃止)と知立駅(現・三河知立)間に連絡通路が階段で結ばれ両駅が統合し知立駅となる。

昭和 25 年 9 月 17 日から朝夕のラッシュ帯に名古屋本線直通列車を運転。勿論、知立信号所経由である。



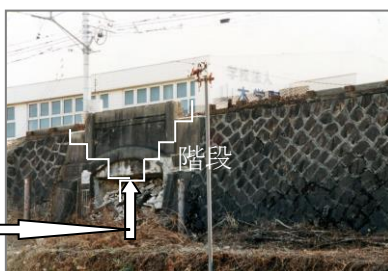
笠松構内を特急大浜港(現・碧南)行が…。



平成 21 年頃の信号所跡



名古屋本線側の知立駅舎(東知立駅)とホーム



昭和 34 年 4 月 1 日から東知立駅と改称(昭和 43 年 1 月 7 日廃止)

名古屋本線は矢印の通路を通り階段を登る。三河線の知立(現・三河知立)から名古屋本線の知立へ行くには、階段を上り通路を通り再び階段を上って乗換えた。